

説に其のまゝに従ふことはない。しかし、其の態度は、ブロー女史の執つて居る態度の様に、どこ迄も人生の大局から幼稚園を考察してゆくのでな

くではないといふのである。之れブロー女史の長逝の報を聞くと共に、女史を懐ふにつけて切に感じたのである。

お 話 の 仕 方

(Shelllock: "The art of Story-Telling" による)

紹 介 子

五、具備したき要素

フレデリック、ハリソンといふ人が「書物の選擇」といふ本の中で次のやうなことを言つて居ります。

讀書に際して最も有益な助けとなることは何

を読むべからざるかといふことを知ることであ

る……知識の茂林の中で、實るべき認識の整頓

せる小區域とも稱すべき僅かばかりの清められ

た場所へ、何を入れてはならぬかといふことを

知ることである。

さて私は前章に於て實ることのない雜草をこの「整頓せる小區域」に生せしめないやうにしなればならぬといふことをお話いたしました。私はこれからこの茂林を開拓して作つた小區域に如何なる種子を下ろすべきであるかといふことに就てお話いたしました。

茲で一寸おことわりして置くのは前章「避けたき要素」中に於てもお話いたしましたやうに私の對象として居るのは通常の發達を成しつゝある兒童なのであります。それ故私の今言はんとするお話なるものもあらゆる兒童の望むお話を包括して居

るといふわけには行かなくなるのであります。病的に又は異常に發達を遂げて居る兒童は私の對象ではないのであります、何故ならば是等の兒童に對しては殆んど如何なるお話でも提供することが出来るからであります、殊に談話者がその兒童に親近して居りその理解力を承知して居る場合には如何なるお話でも採用することが出来るのであります。斯る場合には年齢に就て論ずる必要はなかり發達の程度が問題となるのみであります。

私の經驗上、年齢の如何に拘らず一般に通常の兒童は彼等が日常見馴れ聞馴れして居る物事のお話を好むやうであります。これは理由のあることです、兒童はその想像力が未だ發達して居ない間にはその限られた經驗に訴へて物事を理解するより他に途がありません、兒童は己れの經驗と比較することによつてお話の虚構フィクションへ入つて行くのであります。これに關して面白い實驗を行ふことが出来ます。それは或る一人の兒童に同じ話を一年な

り半年なりの間隔を置いて繰返して聞かせるのであります。この實驗を行つてみると同じお話の中で兒童の興味を感じる場所が常に一定してゐないといふことが分りますし、それによつて兒童の精神的發達と想像力の漸次覺醒しつゝあることを知ることが出来るのであります。この實驗は非常にデリケートなものでありまして正確には行ひ難いのであります、といふのは兒童は一面隱匿性を有して居ると共にその鑑賞も亦屢々内氣のために或は又は表現法の缺乏して居るために伴られたり隠されたりすることがあるからであります。併し兎に角この實驗は興味のある又同時に爲めになる實驗であります。

次に具備したい要素といふのは異常といふこととであります、兒童が精神的に發達して來ると自分の小さな行爲や經驗には満足しなくなるのであります、日常普通のお話ではもうつまらなくなつて來るのであります、自分といふものをお話から

引離してお話を味ふ餘裕を持つやうになつて來る
のであります、この時兒童の要求するものがこの
異常なのであります。

ジョージ、ゴツシェンといふ人が次のやうに申
しました。

幼きものゝために私の望んで居るのは家常茶
飯事を取扱つたのでない本やお話である、私は
小さい兒童の想像力がその小さな生活のイメー
ジよりも更に多くの食料を與へられることを希望
する。私は兒童がその將來に於て達することな
かるべき世界へ誘つて行つてくれるやうな美し
いお伽話によつて時々刺戟されることのない兒
童を憐む……私は兒童をして事毎にその日常生
活を思ひ起さしむるものよりも、兒童をその日
常生活から多少なりとも移し動かすものを善い
と思ふ。

私の管見によれば十二歳以前の兒童にもお話の
中にローマンスを含んだものを與へることは差支

ないことと思ひます。

それからお話の中には是非とも取り入れたいのは
美を愛する念を起させる要素であります、この美
はお話の主人公の性格の美しさから來るのも勿論
結構でありますが言語及び形式の美しさから來る
ものでもよろしいのであります。この目的のため
にはバイブルのお話はかなり價值のあるものであ
ります。

これに關聯して申上げて置きたいのはお話の時
間に時折幾分調子をつけて兒童に詩歌を讀み聞か
せることの面白い企であるといふことであります
兒童はこれによつて始めて韻文の美しさを知ると
至るのであります。七歳位の兒童でも韻文の形式
美を感得するを難しとしないのであります、極く
幼い兒童に聞かせるによい詩の例として短い詩を
次ぎに掲げてみませう。

Milking-Time

When the cows come home, the milk is coming

Honey's made when the bees are humming.

Duck, Drake on the rushy lake,

And the deer live safe in the breezy brake,

And timid, funny, pert little bunny,

Winks his nose, and sits all sunny.

(紹介子曰、幾度かこの詩を譯さんと努めたるも意味を闡明せんために語句のあまりにリズムを離るゝことを許す能はず、原詩のまゝ掲ぐるの止むなきに至る)

これは英國の有名な女流詩人ロセツチの作でありますが藝術的に優秀な、匂やかな、可愛らしい詩ではありませんか、用語も自在ですし、韻を合せやうための苦しい細工も現れて居りませんし、第一モーラリゼーションに急でないのが何より心持がようございます。斯る詩が日本にも澤山あつたら甚麼に児童のために好都合でありませう。

それから又お話の選擇に當つて最も意を用ひなければならぬのはユーモアといふことであります

これは兎もすると下品になり易く児童の感情を粗大にならしめる虞れがあります、下等なユーモアに馴らされた児童は眞正のユーモアを解する力を持ち得なくなつて了ひます。

それから又或る時期に於て原始種族の歴史に關係した迷信的のお話も児童に聞かせて置く必要があります。アンドリュウ、ラングが次ぎのやうに言つて居ります。

我等が若し未開の先祖を持たなかつたならば我等は詩を持たないであらう。すべてのものを商量し、分析し、實驗するやうな現今の如き進化の状態の中にいきなり人間種族が現れたものとしたならば、斯る種族は詩を有せず常識のみを貴しとしたであらう。野蠻人は世界の夢を作つたのである。

しかし斯るお話を児童が何歳位に達した時に話して聞かすべきであるかは問題であります、私は以前は斯るお話は児童の極く幼い頃に話した方が

いゝと信じて居りましたが近頃では必ずしも幼い頃に限られて居るとのみ考へぬ様になりました。

駄洒落や下品なユーモアを排する代りとして私は純粹の奇怪のお話を少しばかり採用したいと思ひます、何故ならば斯るお話はセンチメンタリテイや功利主義の緩和劑として相當の功を奏するからであります。併し奇怪といつても極く罪の無い無邪氣なものでなくてはならぬことは無論であります。

それから又お話の中に現して欲しいと思ふのは動物愛護の精神であります、幼い兒童に對して動物愛護の精神を鼓吹することは容易であります、何故ならば兒童は未だ幼くしてその心を智識のために鎖されてゐませんので、共感的想像力を以て直ちに動物の感情を理解することが出来るのであります。

動物愛護の精神に次いで廣く自然と交る精神を兒童に起さしむるお話も結構であると思ひます、

兒童が静かな氣分で居て、烈しい活動を望まず、たゞ音の喜びに没頭し得るやうな時、自然の姿をなだらかに寫した美しい文をお話として聞かせるのもいゝことであると思ひます。斯るお話を話す際には一應兒童にお話の進行中に別に刺戟的な事件は起らないといふことをことわつて置く必要があります、さうすれば兒童は氣を落附けて一語一語に耳傾けるでありません。

何の位の程度にまで兒童に演劇的刺戟を與へてよいかといふことは問題であります、私は兒童が極く幼少である時分には演劇的刺戟をあまり與へない方がいゝと思ひます。けれども兒童は一般に演劇的刺戟を喜ぶものでありますからこの慾望を適度に満足させてやらないとあらぬ方へ外れる虞れがあります、それ故こゝの呼吸を見計つて適度に演劇的刺戟を兒童に與へることが必要であります。

それから又死を取扱つたお話もいくらか必要で

あります。死の免れ難いものであること、死は不幸ではなく萬人の受くべき通常の運命であることなどを率直に兒童に了解させるために死を取扱つたお話も兒童に聞かして置く必要があります。

六、お話に就ての質疑

今まで説き來つた事柄と多少重複する場合もあるかも知れませんがお話に就ての諸種の疑問を下問答の形によつて述べることにはいたしませう。

一、左まで文學的價值を有せざる話術を研究するに斯くの如く多くの年月を費すことを何故必要と考へるか。

これは役者が舞臺藝術が一般藝術の一分枝に過ぎないにも拘らず自己を舞臺に適せしめんがために多年の訓練を行ふと同じであります、談話者は取りも直さず兒童に取つては役者なのであります。兒童は大人が芝居を見たがると同じやうに芝居を見たがるものであります、然る

に彼等は良い談話者をホンの少し、か持つて居りませんので彼等の演劇的要求は満足とせられないのであります。結果は何ういふことになりませう、私達は止むなく兒童を大人の見る芝居へ連れて行くとか劇としては極めて不完全なお伽芝居を見物させるとかより他はないわけとなるのであります。それ故兒童が極めて幼い頃にはお話を聞かせて演劇的要求を満足させる方が寧ろ賢い方法であるのであります、兒童は強い想像力を持つてゐますのでお話を聞きながら自分で頭の中に舞臺を描いてゆくのであります、それ故本當の舞臺に應用せられて居るやうな機械力による技巧的刺戟を必要としないのであります。

二、兒童が「お話は眞實ほんとうですか」と尋ねた場合には如何になすべきか。

眞理の了解といふことはその了解した人の眼識に依存する所の關係的の事柄であるといふこ

を児童に教へることは必ずしも不可能ではないと私は信じます、又児童に世の中には或る人には分る事が或る他の人には何しても分らないといふやうなことがあることを話すのを躊躇しないならば児童の懷疑は餘程和らげられるであらうと思ひます、詩歌に於ける虚偽は大なる眞を形造るために許されて居ります、それと同じやうにお伽話も大なる眞を形造るために虚偽の分子を含むことを許されて居るのであります、お伽話の世界に於て語られる虚偽に對して児童は決して疑ひを起しはしません、併し現實の中に交へられた虚偽に對しては假令それが如何に小さいものであつても児童はそれに就て直ちに不審を起すのであります。

三、児童がお伽話を好まぬと云つた場合には如何なる處置を取らるゝつもりなるか。

斯ういふことはよくあるのであります。児童が何故お伽話を好まぬといふか、鈍感な散文的

な性質のためか、お伽話を味ふ能力が欠如して居るためか、お話の中に現れて來る驚くべきことが嫌ひな爲めか、判斷力が非眞實として排斥することを眞實として受取らざるゝ苦しさのためか、或は又大きくなつて「もうお伽話でもあるまい」といふやうな氣になつて居るためか、まアいろ／＼の理由はありませう。第一の理由のために好まぬといふのであつたならばその眠つて居る想像力が發達して來るまで待てばいゝのであります。非眞實を有難つて聞いて居るわけに行かぬといふやうな理由であるならば眞理といふものゝ性質をよく児童に話してやればよいのであります。お伽話でもあるまいなどといふのはお伽話をよく味はないのでありますからお伽話を熱心に聞かせるやうにすればいゝのであります、サンタクロースなんていふお爺さんはありやしないぢやないかといふやうなことを言ひ出した児童にはサンタクロースは本當に

實在する人ではないが慈善と親切との化身として現されて居るのであるといふことを話してやればいゝのであります。

四、お話は暗記してゐて一字一句版で起したやうに何時も同じやうに話すべきであるか又は自分の言葉で自在に話すべきであるか。

これはお話の種類に依ることであると思ひます、お話がアンダーセンやキプリングやステブリンンのものの如くクラシカルな味のあるものであつたり、その興味が主として文體に向けられて居るやうなものであつたりした場合には無論一字一句を暗誦してゐて原文のまゝに話すべきでありませう。併し今述べたやうな種類でないお話であるならば何遍も原文を讀んですっかり覚え込んでしまつて後自分の言葉を用ひて一語々々にはおかまひなしで話すのがよろしからうと思ひます。非常に天賦の豊かな談話者があつて言々句々珠を列ねるやうな名文句でお話

をする場合には私の今申したことは孰方でもいゝこととなります。しかし普通一般の談話者は上記の兩方法を必要とするであらうと私は思ひます。

五、お話を準備するには何ういふ風にして行つたらばよいか。

お話の準備も亦お話の種類によつて違つて来るわけでありますがすべての種類のお話を通じて準備の際、是非心掛けねばならぬことはお話をつつかり體得してしまはなければならぬといふことであります。お話の中の主人公にすつかり同化してしまはなければいけないのであります、お話をすつかり體得して居る談話者はお話の紹介者でなく一種の創造者となり得るわけであります。お話の準備に關する實際的の注意としては先づお話の原文を暗誦して了つてから幾度も繰返してみるのです、淀みなく話すことが出来るやうになつたらそのお話を演劇的

に話す工夫をお始めなさい。成丈大きな聲を出して幾度も練習してみるので、一人の人を相手として話す時でも成丈大きな聲を出すことに努めるやうにしなければなりません。それから後は言葉の調子、お話の仕上げ等に御注意すればよろしいのであります。暗誦を主としなければならぬお話は言葉の完全といふことを第一にすべきであります、これが出来てゐない内に演劇的の動作などを考へるものは順序が違つて居ります。身振りや間拍子や顔面表情等が言語の選擇を決する場合がありますが一度公演して見た後には、つきりとその結果を知ることが出来るのであります。身振りを練習する時は鏡の前で行ふのが一番よろしいのであります。役者も身振りを練習する時は大鏡の前に立つていろいろ身體を動かしてみるさうでありますがこの方法が一番よろしいでございます。

六、お話を話題として兒童と話をし兒童に種々の

問ひを發することは如何

これは無論いけません、兒童がお話を聞いて愉快を感じる効果は演劇的手段によつたからであります、然るに質問といふやうな手段によつて分析を敢てしその効果を破壊するやうなことはよろしくないのであります、綺麗な花を見てその色を賞しその香を發して居る時はその花が植物學上如何なる部類に編入されて居るかなぞといふことを考ふべきではありません、それは丁度植物學の時間に花あるがために人生が如何ばかり幸福であるであらうなぞといつて納つてしまふのと一般でかなり問の抜けた、ビールの泡をわざ／＼立たせて了ふやうな仕事なのであります。

七、お話が濟んでしまつた後で直ぐ兒童に今のお話を復誦してごらんなさいといふことの可否。

私はこれには全然不賛成であります。兒童をして常に表現の機會を持たしめることもさるこ

とながらこの場合は表現するよりも寧ろ取り入
れを爲す時ではありませんか、何の用意もない
児童に今聞いたお話を話してごらんさいとい
ふのはかなり無法な注文です、よし児童が喜ん
で話すとしてもたつた今談話者によつて興味ゆ
たかに話されたお話を自分の仲間が覺束なげに
話すのを他の児童が傾聴して居るでありませう
か、お話をする児童も上手に話せないので恥か
しく思ふでありませう。それよりもお話が濟ん
でしまつてから五分間靜かにして居ると児童は
今聞いたお話をすつかり印象に止めて了ひます
憚ひな復誦などをさせるよりいくら効果がある
か分りません。

八、児童に今聞いたお話の繪を描かせることの可
否如何

これも児童が自から望んで描く場合は兎も角
此方から望んで描かせるのはよろしくありませ
ん、到底お話で聞いただけの印象を繪として現

すことは児童に取つて不可能であるのは分り切
つた話です、児童の失望に陥ることをよく承知
してゐながら斯ることを行はせるといふことは
ありません。

九、教室に於て話術の演劇的方法を如何に利用す
べきか。

學校で地理歴史を教授する時教師が演劇的法
方を利用して生徒に話をしたならば生徒は所謂
暗記學課を些の苦痛を覺えずに學ぶことが出來
るでありませう。一々具體的の例を取つてお話
しいなまでもその如何に効果の多いものであ
るかは容易に推察され得るであらうと思ひます
から、くだくだしい説明は略します。

十、お話の中には演劇的要素を多くすべきである
か、詩的要素を多くすべきであるか。

この二つの要素はお話の中に欠くべからざる
ものでありますが孰方かといへば演劇的要素の
方が優つてゐる方がよいかと私は思ひます、何

故ならばすべての児童は活動が好きで演劇的であるからであります。詩的要素も多くの児童の現されない要求でありますが演劇的要素は更に強く児童によつて渴仰されるのであります。

十一、お話の中に含まれるユーモアには如何程の教育的價值ありや。

私の茲に言ふユーモアは普通にいふ滑稽とは別の意義を持つもので單に笑ひを意味するもの

小説 夏子

若葉

一
芳枝さんや三郎さんや恒敏さんがお山の上で遊んで居る。恒敏さんが、いつもの元氣な顔で、顔に汗をいっぱい流して、何だか大層力んで居る。三郎さんが例のおどけた顔をして、小さい目をまた小さくして笑つて居る。こんど新らしく入園した

ではありません。ユーモアは私達に想像力の働きのよつて齎らされた均整感を教へてくれます。ユーモアは児童をしてその論理的機能を發達せしめ匆卒の結論に急がしめない効能を有して居ります。児童に於てはユーモアの發達は極めて遅々たるものであります。急がずに氣を長くその發達を助長してやらねばなりません。(了)

芳枝さんは、白い靴下に茶革の半靴を穿いた兩足をきちんと揃へて二人の傍に立つて居る。其の中に恒敏さんが大きな聲で笑ひながら三郎さんを推した。三郎さんはふざけた手つきをして逃げようとして足がすべつて轉んだ。恒敏さんも其の上へ重なりあつて轉んだ。そのはづみに芳枝さんは足